

【6-6 技術報告】

富山県に現存する最古の寺子屋

教育の情念が蘇る、混放洞

坂井修一 富樫豊 池本敏和

抄録：富山県内の最古の寺子屋を修復する機会に恵まれた。ここに報告する。

Keywords 文化財 寺子屋 土蔵 改修

はじめに

富山の古代から近世までの文化圏が庄川と神通川にはさまれた領域であることに着目して、当該地域の社寺建築を中心として調査していたところ、標記建造物(混放洞)が著者を引き寄せ、命の吹き込みをメッセージにして託してきた。そんな出会いがあった。

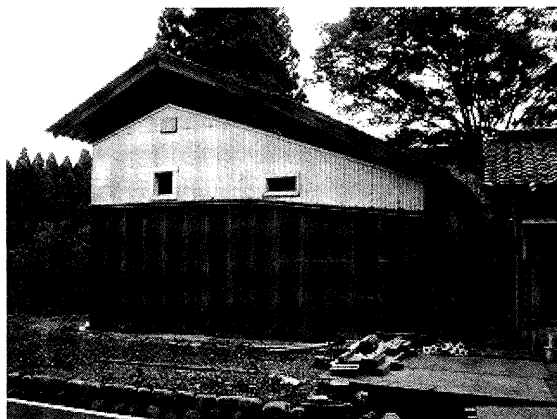
そこで、著者は混放洞がもつ教育の情念を蘇えらせるばかりではなく、建築と環境と風土とのかかわりの重要性を考えた。まずは、混放洞に新たな命を吹き込む改修について話をする。

1. 概要

所在地：高岡市下山田 建物名称：混放洞(コボウトリ)

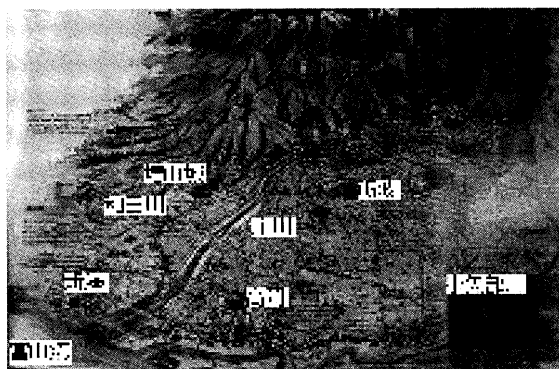
用途：寺子屋(私塾) 建物種別：土蔵

建設年代は1856年以前、幕末期であり、今から150年ほど前である。昭和28年(1953)、石置き置き屋根を瓦屋根に葺き替えた。



北側面を写す。左側(東側)に下り斜面があり、その先に和田川一級河川和田川の河岸段丘に位置するところに立地。近くには増山城跡があり、風光明媚なところである。段丘斜面肩に、間口3間、奥行き5間の土蔵がある。これを、幕末期から明治初期まで、私塾

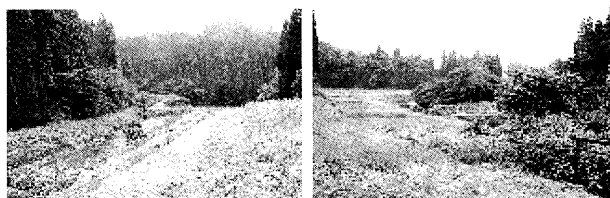
として使っていたという。



位置図 (庄川水利用パンフレットより引用、一部加筆)



和田川左岸側斜面肩にのる当該建物(東側面)



和田川上流方向

同下流方向

2. 寺子屋概要

(1) 教育内容

どのような教育がなされていたのか。寺子屋といえば、読み書



和田川河岸段丘、高岡市下山田地区。正面の山の連なりに沿って和田川。撮影地点背後に庄川が共に富山湾方向(N方向、左側)に流れている。写真中央左の白い仮設テント屋根のものが当該建物。

きそろばんが定評であるが、本寺子屋は人材育成のための私塾であった。文献調査による裏づけはようやく始まったところであるが、その事実を物語る具体的な教育資料が多数発見された。なかでも、貴重な医学書、易学の文献があった。

どうやら道教による教育を行っていたと推察できる。承知のように老子による道教は、現世利益の不老長寿、神仙思想、陰陽五行を中心としたものである。

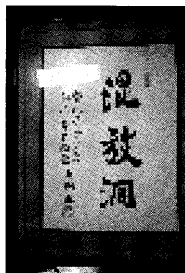
追記：飛鳥寛栗氏から次のような指摘があった。

当時の越中は「朱子学」が支配しており、「道教」の影響は皆無といってもよい状況と考えたほうが適切である。

(2) 願いをこめた教育、寺子屋(私塾)の名称が語る

なぜ当該寺子屋が混放洞と称されたのだろうか。

当時の寺子屋の名称とはまったく格の違いを見るようである。仮説ではあるが、中国思想そのものからきていると思っている。すなわち、「混」とは混沌であり、「放」とは気を放つことであり、「洞」とは奥深いところを明察するところである。



混放洞とは、「物ありて、天地に先立って生ず混沌盛大の奥深いところを明察するところである」といえる。

また一方で、「混放洞とは身分の違いを超えて人を集め、既成概念より人を解き放し自由にする奥まった場所」と解釈している人もいる。いまだ、藪の中にある。

(3) この地における教育実績

漢学者である河合平三氏は、幕末期に上記の思いをもって寺子屋を建造し、教育を行ったのであろう。

ちなみに、医学書について、富山大学医学部の方にお見せしたところ、一級品との評価をいただいたが、なぜ片田舎のあの場所でこれらの資料があったのかが理解できないとも言っておられた。道教思想をバックボーンにあることを考えれば、上記の疑問はたちどころに消えてしまうものと思われるが.....

3. 建物の特徴：構造的および材料的特徴

建物は、当地において使いまわしの材料を使い、施工されている。以下に述べる。

・土蔵は、二階建てのごく普通の箱型のもので、間口3間、奥行き5間である。1856年(幕末)、この土蔵を増築し、これを塾として混放洞を開いた(古文書より)。増築部は「戸前」と呼ばれる下屋のようなもので、間口3間、奥行き2間となっている。屋根については、本来なら本体と付け部の境で屋根が段状となることを、一枚の連続屋根となっている。こうした外観が、一般の土蔵には見られない風情をかもしだしている。

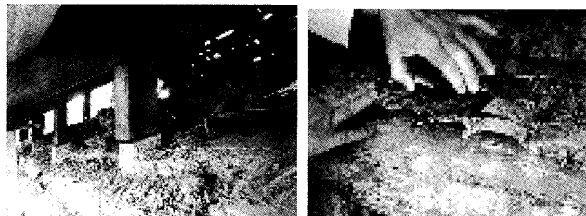
・土蔵は通常無窓である。土蔵を塾として使うために明り取り用に、窓は西面に1箇所、東に1箇所、南面に1箇所の計3箇所に設けられている。

・戸前の二階西側は、教師の部屋であり、床の間がある。床の間は



神聖なところとして、今でも家の人は敬意を表している。二階の他の部屋および1階は弟子たちの部屋となっていた。教師の声がすべての部屋にいきわたるといったところである。

・置き屋根は当時、石置き木皮葺であったという。昭和の修理で瓦葺きとなった。土屋根は野地板の上には杉皮7mmのものを二枚重ねて載せ、しなやかさをかもし出している。また杉皮の上に(スライス状の)竹小舞をひき、その上に泥を塗っている。



・使用された木材については、柱と土台では「あて」を、梁には「松」を使っている。材の大きさについては、土蔵本体では8寸材が使用されている。下屋部分では5寸材が多用しているが、一部6寸材も使っている。

・素材を自然のままに使用している。たとえば二階床の根太に松材が使用されているが、松材の左右にゆがんだような曲がりも何の違和感なく、かえって美しく力強くみえる。

・壁土は非常に決めの細かい良いものである。近所に良い土が出たとのこと。打撃を加えたくらいでは土は少しも落ちない。

4. 改修

(1) 改修骨子

持ち主がどうしても(とにかく改修して)残したいとの意向を汲んで、改修に当たった。その際、当該建物は文化財の指定を受けるに十分な価値を有していることに鑑み、文化財保存の姿勢でのぞむこととして、当地の風土と当該建物の関係性をそこなわないように、また建物の気品を継承することに努めた。

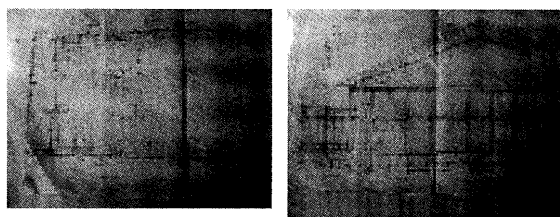
改修の理念は、建物に新たな命を吹き込むことである。このため、どのようなことをするのか悩んだ。具体的な骨子を次のようにした。

・第一には、建物そのものは、現況のまま改修することだから、壁は一切土を落とさず、荒壁とする。

・第二には、「対震」には上屋には一切手をつけず基礎部分で対応することにした。これは、現代技術を構造物本体に一切かかわらせないということである。

・第三には、改修後の使われ方にも踏み込み、持ち主に愛着のもてるものであるとともに、開かれたものとする。

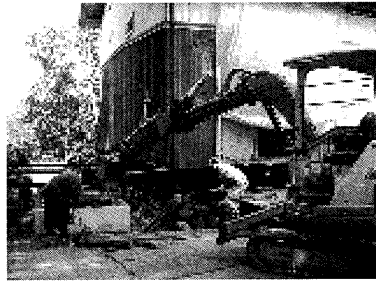
なお、改修の図面は写真のとおりである。



(2) 具体的改修内容

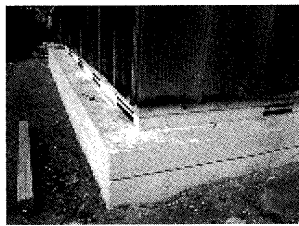
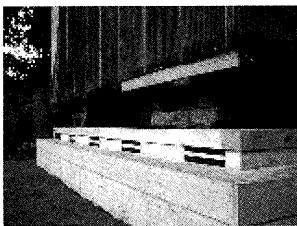
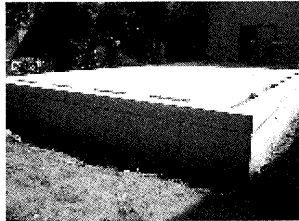
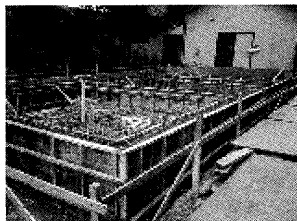
(a). 曳き家

基礎をやり直す際に、上屋を移動させねばならなかった。曳き家では、二種類の方法がある。ひとつは、土台の上の土壁を2cmほど水平にカットして、この隙間に土台を拘束するように鋼材を入れて曳き作業をし易いようにする工法である。いまひとつは、そのようなカットをせずにかすがい(かけがね)を利用する方法である。今回は後者の方法を採用し、ジャッキは1cmほどの不同差の範囲内で、壁土を破損することなく、曳き家を行った。



(b). 基礎・土台について

- ・改修前の基礎は石基礎であり、大谷石に似た近辺(砺波)から産出された石が使用されていた。
- ・対震については、地盤免震を採用し、上屋の耐震補修は行わないものとした。
- ・文化財においても対震性能をあげるために免震装置をとりつけることが流行だが、そんな方法よりも地盤のほうに免震性能を具備すること(地盤免震)の方がはるかに効果的であり、かなりのローコストになる。詳細は追ってレポートしたい。ちなみに、住宅には今流行の免震装置をつける必要はまったくない。



・木材の腐食を防ぎ抗菌するために、銅版を土台と布基礎

コンクリートの間にかますが、その銅版の厚さは通常0.4mmのところを、1mm



にした。この位の厚さがあれば銅版そのものの耐久性・荷重・腐食にも対応できるものと考えている。

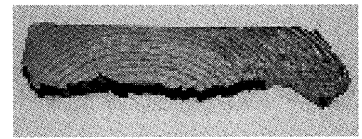


(c). 上部構造物

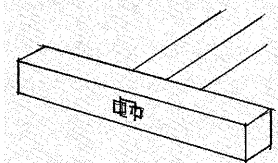
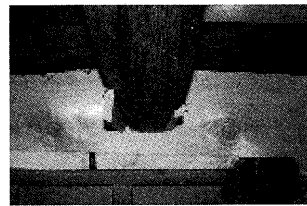
- ・垂木・野地板の上に泥を載せているので、泥の湿気が垂木の上端から内部にむかって腐食を進行させており、シロアリ

に食われていた。打撃音ならびに目視では、腐食しているかどうかはわからなかったが、念のために木材をはずしてみても腐食を発見したしだいであった。なお、今回の調査では、含水量測定、超音波測定、応力波測定は行っていない。

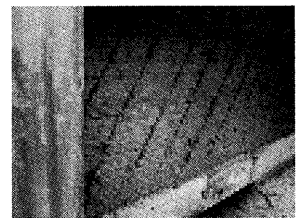
- ・土台については、「あて」材が使用されているので、虫食いは表面のみで深部までまったく達していない。写真では、傷んだ土台材を断面方向にスライスにし、材の(鉛直下方)下側2/3域の腐食部を除去した。上側1/3域では、木質の緻密さがしっかりとみてとれる。富山県木材試験場の栗崎氏によると、シロアリによる食われ方には種々あるものの、このような食われ方はたいへんめずらしく、なぜそうなったかはわからないといっておられた。



- ・桁と梁の仕口部では、ほぞによる接合となっている。腐った桁を新木にとりかえたために、梁との接合を直すことになった。ほぞそのものが痛んでいる梁の接合には、力の流れ、量を推定し、計算で検討し、下図のようにほぞの両側にそれぞれ楔を挿入した。



- ・木造構造物で100年も経過すると、全体に対して30%ほどの木材は傷んでいるというが、本構造物では、取り替えた木材は全体に比して10%にもみだりなかつた。これは、当該建物が斜面肩に立地していることにより、風通しが良いため腐らなかつたものと思われる。このくらい腐った木材が少ないのは大変めずらしいことである。
- ・戸前部の梁が破損していたところの壁の一部が曳き家の際に1~2cm程下にずってしまった。この部分については、竹小舞をやり直し、泥を塗りなおすことにしている。なお、壁土は福井県武生のものを下塗りに、当建物からのものを塗りなおした。



- ・泥葺きの下屋根については側壁頂部の壁塗りとともにやり直した。



- ・壁については、漆喰仕上げや板張りなどがあるが、荒壁は富山独自

のもので、他の地域では見られない。ただ、防水性を向上させるために、一工夫を考えて、今はメーカーの方で実験を行っている。

・シロアリは、材を一度食したら、その後はその材には寄り付かないという習性がある。

(3) 施工に際して

・こちらの意図することをしっかりと伝え施工させるために、小さな現場だからこそ、毎日朝早くから現場を視ている。時として一日中現場にいたこともある。

・基礎工事では、建築の業者ではなく土木の方を使うことになった。

・コンクリートは羽根建設の提案によって高炉セメントを使った。耐久性に優れているからである。ただし、気温が摂氏 35 度を超える猛暑日が続くなかでの暑中コンクリートであったため、コンクリート管理には心を砕いた。

・曳き家作業では、壁土を一切落さないよう注意深く行った。

(4) 仕事に携わって実感したこと

・著者がディレクターとして施工を行っている。選定した施工業者は文建協の仕事をも多数こなしているのも、非常に高い技術を持っている。

・改修は虫害や腐食との戦いといった様相にあるといつてよい。木質の鑑定を木材試験場にお願した。雨の部材への浸透、土からの水分の浸透を構造物の形状との兼ね合いで、鑑定結果を活用した。

5. 当地の教育環境・文化環境

(1) 地域文化

・庄川と神通川には生まれた地域は、ほかの地域に比べて文化水準が大変高い。これは、文化が水路を通して平野奥深くまで伝播した結果である。水路は山麓手前まで確保できるので、例えば庄川をさかのぼって千光寺などの大寺院があることからわかるように文化が水路でつながっているといえる。

・上記二河川には生まれた領域に散在している大きな寺院は、いずれも交通の要所に位置し風光明媚なところに立地している。

・対比して県東部域を考察すると、いずれの河川も急流であるために、水路を介した文化の伝播はあるものの、海沿いの地区にのみ文化が定着したと考えられる。

(2). 教育

富山県の塾および寺子屋については、前田英雄先生が研究されておられる。先生の研究によれば、富山における教育施設として、これまで大きな役割を演じた塾・寺子屋や藩校は次のとおりである。

- (1) 小西屋 (臨池居)。小西有義の私塾
明和3年(1767)～明治32年
- (2) 藩校「広徳館」。教官は岡田呉陽。1661～1672
- (3) 広沢塾 (水見市)。広沢周斎の私塾
天保5年(1835)～明治7年
- (4) 聞名寺 (八尾)。富山で最古の寺子屋。
読み書きそろばん。
寛永9年(1632)～明治期
- (5) その他

混放洞は、人間を磨く教育により、(富山における)昔の著名人(県西部地区)を多く輩出した。また混放洞の塾長は、杉木教学所 (明治2年から4年まで存続。十村が設立。砺波市) の教師と戸長を務めたという。

なお、天神様をまつたものとしては、於保多神社(富山市)、水島神社(小矢部) 天満宮 (射水市) があることを付記しておく。

(3). 混放洞周辺環境

混放洞のある地域は、和田川および庄川により形成された広大な河岸段丘にあり、はるか北は小杉・富山湾まで、西には小矢部まで見渡せるもので、

富山において他にはないものである。このため南北朝時代・戦国の時代には、当該地域は軍事的要所として山城である増山城が位置し、城下町も形成されていた。混放洞はこのような風光明媚なところに立地しており、少年が大志を抱くには、もってこの場所といえる。

なお、今は、城跡が 2009 年国指定の史跡となっており、砺波市はここら一带を観光地化し、地域の整備に着手している。

6. 地域づくり

・(前章にあるように) 当地は文化水準の高い地域であったことを裏付けるがごとく、混放洞で学び後に県初の国会議員となった島田氏の邸宅もある。これは、明治時代に建てられた洋館の香りのする木造住宅である。

・地域の方 20 数人と、当地におけるこうした建造物の文化的価値をどう活用していくかを話し合った。文化的価値の高い建造物は遺産として残すことにやぶさかではないが、保存のための経費の面を考えると、頭がいたいといった声はもちろん出た。また、文化価値を自分の手で守り育てて生き、地域の宝にしていくべきである、といった頼もしい意見もあった。

・著者は、青少年の教育の観点で、混放洞や島田邸、増山城を含めた和田川河岸段丘一帯を野外体験学習の場として、地域がつくられていくことを願っている。

7. 建築家の役割

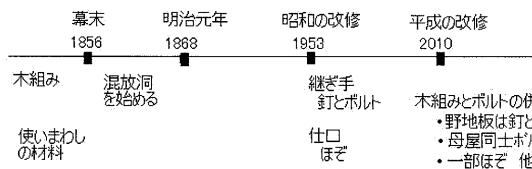
(1) 文化財の修復の持論

文化財に申請してもおかしくない当該寺子屋はれっきとした文化財である。こうした文化財を後世に残すことになれば、改修をしなければならぬが、実は現代技術をもってして改修時には誤った工法を取ってないしにすることもままある。原因は改修の現場技術者は技術を知らないままに経験で対応するところにある。とくに、地震に対してどう対処するかについては、建築専門家ですらよく分かっていない。実は、地盤と構造物を一体として考えることのできる方がほとんどいないからである。(建物は地盤上にある。地盤は土木の範疇、建物は建築の範疇として、分業化が進みすぎている。)

今、工学においては、こうした点を鑑みてすどく現状を批判するとともに、最先端の技術を下々の建造物にも適用すべく頑張ることが望まれている。特に、高価な免震装置を取り付けるのは木造の文化財には似合わないとして、地盤のほうに免震効果を期待する工夫が富山の地において試みられようとしている。これもおそらく日本発である。

(2) 伝統技術文化の継承と創生

大工仕事では、ノミがドリルに、カンナが自動カンナに、釘打ち・ネジ打ちが電動打ちに、手仕事は道具使用さらに機械使用に、使用道具が変わってきている。こうした状況のなかで「ものづくり」すなわち木造建築が直面しているのである。一般の建造物では、そうした時代の流れを反映した施工が行われていくようである。これも、技術の継承のあり方である。よく、伝統工法を守ることが継承といっているが、そうではなく、継承とは時代とともに形を変えていくものも含まれるものであり、創生といってもいいのである。



よく、伝統工法を守ることが継承といっているが、そうではなく、継承とは時代とともに形を変えていくものも含まれるものであり、創生といってもいいのである。

8. おわりに こうして混放洞に新たな命を吹き込むことにより、人と建築と環境との新しい関係が生まれてくるように願っている。このような物件に出会わせていただきました河合さまに感謝申し上げます。